
空の君と

青芽野 雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の君と

【Nコード】

N9978X

【作者名】

青芽野 雫

【あらすじ】

空っぽ“だった”少女と、空っぽに“なった”少年との日常を描く。2人は“綺麗”を探し、歌を歌い、共に支え合って暮らす。基本ほのぼのときどきシリアス。そんな連作短編小説。

“綺麗”を見よう

「君の瞳は、綺麗な青だね」

目を覚ますと、目の前の少年は私の目を見てそう言った。短く切った黒の髪に寝癖をつけ、まだ少し眠そうな目をしながら。

朝、あなたは時々こう言って微笑む。その時、私はその邪気のない微笑みこそが美しいと思うけれど、何も言わないでいる。言ったら、すぐにその表情を崩して、気難しそうな顔をするからだ。

「さあ、起きて。今日は朝から森に行こうか」

まだ朦朧とする意識の中、ベッドに倒れてシートにくるまつたまま、ぼーっとあなたの笑みを見ていた。あなたは急に私の手を握ると、私を引っ張り起こした。

ベッドの左横にある窓から吹き込んでくる朝の涼しい風が、私と彼の頬を撫でる。

「今日も綺麗に晴れたね」

そう言う彼の顔を金色の光が照らし、眩しそうに目を細める。私も眩しくて目を細めながら、窓の外を眺める。

どこまでも広がるかのような草原は森で打ち止めになり、その森の後ろには頂上に雪を頂く高く険しい山が見える。朝日はその全てを金色に輝かせ、化粧をしたかのような景色はいつもとは違う“綺麗”を見せる。

私が引つ張りあげられた姿勢のまま、ベッドに座ってその景色を眺めていると、

「……僕はさ、あんまり好きじゃないんだ。太陽って。」

唐突に、あなたは少しだけ悲しそうな声でそう言った。私はゆっくりと外の光景から目を離し、外を見たままの彼の顔を見てこう聞いた。

「……なんで？」

彼は窓の外の光景から目を離し、私の膝に掛かっている白いシートが金色に輝くのを見ながら、

「直接見ると、眩しすぎて、他の物は何も見えないじゃないか。もし直接見なかったとしても、太陽はみんなが持つてる自分の色無し視して、勝手に染めるんだよ」

彼の見つめるシートを私も見て、シートの上に手を翳して日の光の存在を確かめる。白いシートに、私の手の形の陰が出来る。あなたはその影を眺めながら、

「太陽っていう主演の前では、周りの物は引き立て役にしかたないんだよ」

と言った。

少しの沈黙が出来た。その間ずっと彼はシートに映った影を眺め

たままでいる。

私は中指と薬指を曲げ、人差し指と小指はピンと上に伸ばしたまま、その2本の指先を親指の先とくっつけた。

そうして、手をすこし動かして目のあたる角度を調整し、影が狐みたいに見えるようにしてから、

「……コンコン」

と鳴き真似をしてみた。

また少し沈黙が出来た。

彼が黙ってしまったので、気になってチラッと彼を見ると、びっくりした表情をしていた。

でも、それが段々笑い顔になって、ついに吹き出した。

「……ふふっ、なにしてるんだよ」

「……今、笑った？」

私が無表情に彼を見て言ったからだろうか、彼は固まった後、手を前でブンブン振って、冷や汗をながしながら、

「い、いや、今のは、その……な？」

とか言っている。

なにか勘違いしているみたいだけど、無視した。別に恥ずかし

ったから無視したとかでは、全然ない。

彼が俯き始めたところで、私はこう言った。

「今あなたを笑わせたのは、太陽っていう主役じゃなくて、影っていう脇役」

彼は、はっとして顔をあげると、私を見た。

彼は太陽の前じゃ他は飾りでしかなくなるから、嫌いだって言った。でも、飾りでしかない影にしか出来ないこともあると気づいてほしい。

「だから、あなたが太陽を嫌う理由は無い」

私の見ているすぐそこにある“綺麗”を、あなたにも知って欲しいから私は言葉を紡ぐ。

「太陽も影も、本当は同じ“綺麗”の1つ。だからもう一回、一緒に外を見よう？」

彼はゆっくりと顔を私から窓へと向けた。私も窓の方へ顔を動かして、彼と一緒に外を見る。

黄金色の輝きと黒い影が生み出す、美しい調和。

しだいに色は光から影へ、影から光へと変わり、真逆のはずの2色を1つに繋いでいる。

染め上げられる草木は、その下に確かに自分はいるんだと主張するように影を落とし、影の中や周りにある黄金と互いを引き立てあう。

光だけでも、影だけでも出来上がらない“綺麗”。

「……………わ……………」

しばらくして彼は驚いた声を出した。

彼の瞳は輝いて、驚きと感動がない混ぜになった表情で食い入るように外の景色を見る。

私は、そんな彼を見て、彼とまたひとつ一緒に見れる“綺麗”が増えたことに喜びを感じる。

『君に見せたい景色があるんだ』

私はその思いをのせて歌う。

すると、彼は微笑みながらこちらを見た後、目を閉じて一緒に歌った。

『それは僕の中にある』

『だから僕は君に伝えよう』

『この歌に思いをのせて』

『君と共に歌える日がきたら』

『次は君の歌を聞かせて』

『そして僕も共に歌える日がきたら』

『次は2人の歌を作ろう』

『そしてみんなに伝えよう』

『僕と君の思いをその歌にのせて』

森へ行こう

ギィと音を立てる扉を開けて三步外にでると、全身で風と太陽を感じる。

風にのつてくる草の匂いが心地良い。

隣に並んだ彼女も心地良さそうだ。

僕は朝の眠気を完全に吹き飛ばすために伸びをした。

「んっ！本日も快晴快晴！」

空は雲一つない冴えた青だ。

彼女の瞳と同じ色で、僕は少し頬が緩む。

「にやにやしてるけど、どうした？」

すると急に足元から声が聞こえてきた。

この声は……

「おはよう、アカメ」

下を見ると、こっちを見上げる白い兎がいた。

「ん、おはよー」

笑いながら彼女はそう言った。

すると、隣の君はしゃがんでアカメにこう話しかけた。

「今日はどこで歌ったらしい？」

「そうだなあ……秋の森のみんなが次はうちの番だ！とか言っているから、秋の森かな」

「わかった。ありがとう」

ばいばーいと言って、彼女は俺たちの後ろの森、通称春の森へピョンピョン走っていった。

彼女から視線を外し、顔を正面に向けると、遠くには青白い山が見え、その手前には紅い森があるのが見える。

その森が通称秋の森といわれるところで、僕達のいくところだ。森の木は全て紅葉し、色鮮やかな景色を見せてくれる。

正に情熱的な色合いなので、彼女はここで歌うと思わず感情が入りすぎて急に泣くことがある。

その日はいつも帰るときの方が行きより凄く機嫌が良くて、踊るようにしながら彼女は帰路につく。

ある時、彼女になんでそんなに機嫌がいいのかと聞くと、涙を流すと心のもやもやが晴れるからだと言っていた。

それまで僕は男だから、とかいう理由で泣くのを我慢していた僕は、その時から我慢しないようにしようと決心した。

それ以降、何回か感極まって泣いてしまったのだが、泣いた後は彼女のいう“綺麗”が凄くよく見えた。

泣くと心のくもりを消してくれるという事を、身を持って知った僕だった。

閑話休題。

家から秋の森までは、歩いて大体十分というところだ。

「んじゃ、行こうか」

こう言って彼女の方を見ると、彼女は名残惜しそうにアカメが行ったほうを見ていた。

可愛いもの好きだもんなあ……

僕らの家は森に囲まれ、さらに山から囲まれている。

周りを囲む山は正方形を描いていて、4つの辺は別々の四季を持っている。

我が家の玄関側が秋であり、そこから時計回りに冬春夏となっている。

どこに行っても森しかないが、僕はここが大好きだ。

「秋の森に行くのはいつぶりだっけ？」

「1ヶ月ぶり。最近は冬の森に行ってたから」

そう、最近は冬の森で歌を歌っていた。

そこで僕は銀世界の美しさを彼女に教えてもらい、それですっかり僕は魅了されてしまった。

そんなわけでわがままを言って足繁く通い、入り浸ってしまったのだ。

「んー、なんかあんまり時間たった気がしないんだけど、そんなに……。他のみんなには悪いことしたな」

苦笑しながらそう言つと、

「久し振りに別の景色を見たら、いつもより“綺麗”を見つけやすい。だから、私は楽しみにしてる。あなたはどうか？」

こう彼女が聞いてきた。

なるほど、確かにそういう考えもあるんだな、と感心する。

「ああ、楽しみだよ。それ聞いてより一層、ね」

あと少しで秋の森に着く。

今日はどんな“綺麗”をみつけられるだろうか。

嗚呼、本当に楽しみだ！

森で歌おう 秋編その1

秋の森の真ん中には木の生えていない丸い緑色の空間がある。

周りは紅く染まった木々ばかりなのだがその空間にだけ緑の芝生が生えているので、この森の名所と呼ばれる場所の1つと言われている。

僕と彼女はそこの中央に立っていた。

ここには、さんさんと太陽が降り注ぎ、木々の色の移り変わりを表現するかのように、紅と緑と黄が混ざりあっている。

その真ん中、僕達の前方の足元に一匹のリスが寝ていた。

「すー……すー……」

小さい影が規則正しく呼吸を刻んでいる。

僕達はいつもこの真ん中で歌い、他のみんなは回りの木々の影で思い思いにくつろぎながら聴く。その時ここに来る順番に関する面白いルールがあり、三番目までに来た者は特等席と言われる僕達と近い場所で聴くことができる。

このリス——名前をモケットといい、特等席をとるために日中常にここにいるのだ。

僕達がどの森に行くのか、いつ行くのかなどはその日の気分次第なので、毎日モケットはここに来る。

そつえば昔、ここで歌おうとして初めて来たときもこんな風に寝ていたなあ、と思っていたと、

「…………ふわああっ」

と、目を覚まして伸びを始めた。

「モケット」

「うわあっ!？」

彼女が声をかけると、もの凄い勢いで飛び上がった。
かと思つと、

「おお、歌姫様！ お久し振りです」

と言つて彼女の前にちよこんと膝をつき頭を垂れそう言った。

彼女は、みんなから歌姫と呼ばれ慕われている。

彼女は頬を緩ませ目を輝かせて頷きながら手を前に差し出すと、
モケットは素早い動きでその手を駆け、彼女の肩に乗った。

「姫、今日はいつから歌を歌いになられるのですか？」

「みんなが集まり次第歌い始める」

「わかりました。では、私がみんなには伝えてきましょう」

「いや、今日はいい。私達が直接みんなを呼ぶから」

「ふむ、やはり、久し振りだからですか？」

「ん。大分来てなかったから、みんなと話したくて」

「姫はお優しいですねー、はっはっはっ」

はっはっは、ふふ、と笑い声が響く。

ごらんの通りモケットは彼女の騎士のような存在であり、この森に来る度このような会話が行われる。

一見微笑ましい光景である。

が、それを見る僕の表情は硬い。

するとモケットはこっちを見てにやつとすると、

「これはこれは奏者殿。今日も仏頂面がお似合いですな」

歌姫に対して僕は奏者と呼ばれている。

歌姫と共に音を奏でる従者。

そのような意味をこめてみんなは僕をこう呼ぶ。

モケットがいつも通り僕に絡んできたので、僕も応戦する。

「モケットも、昼寝の時のよだれで顔がてかてかなのがよく似合ってるよ」

なっ！？ とか言って顔をゴシゴシし始めた。

それを見て彼女は笑っている。

このようにモケットは毎度僕に突っかかってくる。

昔は本気で嫌いあっていたのだが、彼女のおかげで今はなんだかんだ仲がいい。このやりとりは昔のなごりというやつだ。

モケットはムスツとした表情をして、

「その口はよく嘘をつきますね。このほら吹き！」

「いや、嘘じゃないって。彼女に聞いてみなよ？」

「嘘ですよ？　嘘ですよっ？」

そう必死に彼女の横顔に話しかける。

彼女は首を傾げ、さあ？　と言った。

その反応に、まさにガーンという感じで四つんばいで落ち込むモケット。もちろん嘘なのだが、彼女は意地悪でさあと言ったわけではない。

なぜかというと、彼女が横を向いたらモケットにぶつかるため、彼女は正面を向かざるをえないのだ。

つまり、そもそもモケットの顔を見れないわけで、彼女が首を傾げるのは正しい反応なのである。

「……ははっ」

そんなやりとりが楽しくて、思わず笑ってしまう。

「……ふふ」

「……はっはっは」

彼女も笑い、モケットも一瞬キョトンとした後笑い出した。

三人でしばらく笑った後、

「じゃあ、行こうか」

「そうですね」

「うん」

僕らは秋の森のみんなに会いに行った。

ふと、ここでこう思った。

これ、みんなを回り終えた時にはいつになってるんだろう……

ま、楽しいからいつか。なんて思いながらその考えを打ち消した。
こういう樂觀思考も大切……だよな？

森で歌おう 秋編その2

遠くから秋の森を見ると、周りの木よりも明らかに高い木が一本ある。

その高さと美しい紅葉から、森のみんなには「紅の塔」と呼ばれている。

今僕たちは、その紅の塔の前に来ている。

「や、久しぶりだねえ」

その木陰からそう言ってこちらに笑みを向けるのは、大猪のゴウだ。

ゴウは高さ2mとかなり大きく、彼と木の巨大な2つを見るとまるで僕達が小さくなってしまったような感じがしてしまう。

だがその見た目とは裏腹に、彼は優しくおっとりしているので、彼と話している時はその大きさを僕達を温かく包み込んでくれるような、そんな安心した気持ちになれる。

「久しぶり。この頃は何をして過ごしてたの？」

「最近は冬の森に通っていてねえ。今日も行ってきた、ついさっき帰ってきたばかりなんだねえ」

「そうなの？ 実は僕達もつい昨日まで冬の森に通っていたんだよ。いやあ、それなら一緒にいけば良かったなあ……」

会えなくて残念だったよ」

「んー、僕は日の出を見るために、夜明け前に行っていたからねえ」

ゴウも“綺麗”が大好きで、よく他の森に行ったり山に登ったりしている。

そんなわけで僕達はお互いの“綺麗”情報を交換したり、一緒に“綺麗”探索に出かけたりしている。
いるのだが……

「夜明け前に？それじゃあ、多分一緒にいけなかったらうなあ。僕達朝早くに起きるの苦手だから……」

情けないことに僕らは2人とも朝が弱い。朝日が上って起きることは起きるのだが、互いにボーっとして気づいたら昼間、なんていうのが日常茶飯事なのだ。

だよな？と思って、後ろにいる彼女を見ると、

「むー……」

と唸りながら、そんなことないもんといったげな目で僕を見ていた。

どうやら、彼女は冬の森から日の出を見たいらしい。

僕は苦笑しながらゴウのほうを振り向いて、

「やっぱり頑張って起きてみるよ。その時に一緒に行こう？」

「そうですねえ、是非お二人と一緒に見たいですねえ。
大丈夫、その時は僕が起こしに行きますからねえ。」

ゴウは嬉しそうにこう言ってくれた。
その言葉を聞くと彼女が僕の隣にきて、

「ありがとう。その時は私達も頑張ってみる。楽しみだね」

と言って微笑んだ。

すると彼女の肩で伏せていたにモケットが急に立ち上がって、

「私もお供いたします」

と言い、恭しく一礼した。

寒いのが苦手なモケットがこうまでして“綺麗”を見たいと言っ
なんて成長したなあ、と感心していると、胸を張って誇らしげにこ
う言った。

「この私のモフモフの毛で、姫の首筋をお守りしましょう！」

……マフラーとしてついていくようだった。

「うん、モケットもよろしくね」

今日も騎士は姫のために身を粉にして働くのだった。

「それじゃ、他のみんなのところも回ってくるよ。あ、今日はいつ
もの場所で歌を歌うよ」

「いつからかねえ？」

「夕方になりそう。もし早くなりそうだったらその時はヒューイに
頼んで呼びにきてもらう。安心して待っていて」

「わかったねえ。楽しみにしとくねえ」

そう言ってゴウは地べたに腹這いになって寝てしまった。

早朝の冬の森のおそろしい寒さのせいで体力を消耗してしまい、
疲れているのだろう。

その様子を見てみんな顔を見合わせ目配せすると、口の前で人差し指を立てながら、静かに次の場所へと移動を始めた。

森で歌おう 秋編その3

「あれー、ヒューイの奴どこにいるんだ？」

「確かにここらへんにいるはずなのですが……」

紅の塔を左に曲がって歩くこと一時間。

ヒューイを僕たちは探していた。何故かというと、ゴウにメッセージを伝えてもらうためだ。……いや、そうだったのだが、というほうが正しいかもしれない。

何故なら、十分ほど前の会話でこういうやりとりがあったからだ。

「これじゃあ、みんなのところを回るのは無理みたいだな」

「どうして？」

「多分、この調子でほかのみんなも探していたら、歌い始める頃には朝になっちゃうよ」

僕の言葉を聞いて、彼女は残念そうな顔をする。

「……それじゃあ、どうするの？」

「私がみんなを呼び集めてきましょう！」

モケットが、私に全てお任せを、という表情で胸を張った。

「……みんながいる場所、知ってる？」

「いや、それは、その……」

彼女の言葉に少し落ち込むモケット。

「だから、モケットは私たちと一緒にいて？」

今の言葉でモケットは満面の笑みになった。そうしてコクコク頷いている。全く、現金な奴だ。

「僕は、ヒューイにその役目を頼もうと思ってる。彼なら多分、みんながどこにいるのかも知ってるだろうし」

そんなわけで、僕達はヒューイを探し続けている。いつもはここ周辺に良くいるのだが……

今日はいないのだろうか、そうだったら不味いなあ、などと考えながら周りを見渡していると、

「うわあっ!？」

急に上から黒い何かが降ってきた。

僕の目の前に着地したそいつは、素早く右隣の木に登り僕の視線の高さまで来ると、脳天気な笑みを浮かべ僕を見た。

「へっへ、びつくりしたか!？　びつくりしたかあ!？」

この黒いやんちゃな子供ムササビこそ、僕達が探していたヒューイである。

僕が苦笑していまの行動を注意ようとすると、

「ヒューイ！　貴様何を考えている!？」

モケットがもの凄い剣幕で怒り出した。

「えー？ どうして？ どうしてえ！？」

「あのような現れ方は危険だろう。もしぶつかったらどうするんだ！？」

おおモケットが正論を言っている上に俺の心配をしてくれている、感動だ。

「姫様に！」

……僕の感動を返してくれ。

「むー、わかった、わかったよー」

「うむ、ならばよいのだ」

ヒューイはモケットより2周り程大きいが同じリスの仲間として何か通じるものがあるのだろうか、彼の説教には渋々ながらも従うのだ。

ちなみに僕の言うことには耳も傾けずサラッと流されるだけなのだから、我ながら情けない話だ。

ただ、彼女の言う言葉には……

「今日はいつものところで歌を歌うから、みんなへのお知らせ頼んで良い？」

「ハイッ！」

このように、完全なるイエスマンである。

もしかしてヒューイがモケットの言うこと聞くのって、ヒューイと仲良くなって彼女の第2の騎士になろうとしてる……とか？

か、考えすぎだな。うん、きっとそうに違いない。そんな邪推を振り払おうと頭を軽く振った。ヒューイを見ると、これから木に登りますよ、というような姿勢をしていた。

「では行つてきます！」

「あ、ちよつと待つて。他のみんながどこにいるかは知ってる？」

「ハイッ！ 今日みんな集まつてワイワイやるという話を聞いたので、どこにいるかもその時に」

「ん、それなら大丈夫だね。ありがとう。それじゃ、いつてらっしやい」

「イッテキマス！」

そう答えてもの凄い勢いで木を登り、頂上にたどり着くと目的地へ滑空して行つた。

ヒューイの姿を見送るために上を見ると、空は赤く染まっていた。

「もう夕方か……」

森の紅と空の赤。混ざり合う2つのア力を切り裂くようにしてヒューイは滑る。

「結局、夜になっちゃいそうだね」

「夜の秋の森というのも乙なものだよ。さ、姫。夜になってしまふ前に行きましようか」

「わかつた。行こう」

彼女が僕に手を差し伸べている。

彼女の金の髪がア力と混じり合い、輪郭が曖昧になる。

そんな何もかもがぼやけて見える中、彼女の青い目だけがはっきりと見える。その瞳は宝石のようにきらきらと輝く。僕はその手を取って彼女を見つめ、頷いた。

「行こう、そして歌おう。2人で、さ」

道中、彼女と僕が手を握ったまま歩いているのを見て、モケットがジーツと僕を睨んできた。

彼女が転ばないようにエスコートしてるのだと言うと、モケットは何も言わずに僕と彼女が丁度手を繋いでいる上に走って行って、そこに前足をかけてぶら下がりはじめた。

僕と彼女は目を合わせ、互いに吹き出した。

しばらくの間、僕達の笑い声が森の中に響いていた。

森で歌おう 秋編その4

暗い空に月が浮かんでいる。今日は満月だ。明るく輝く丸い月が森を照らす。森は仄かに紅く光り、昼間とはまた違った美しさがある。

今僕と彼女は森の中にぽっかりと空いた空間にいる。ここには直接月の光が降り注ぐ。周りの木陰にいるみんなが、俺達を見て小さな声でささやきあうのが聞こえる。久しぶりの歌なので、みんな大分楽しみにしているようだ。

小さいささやき。弱い風が吹く音に、木がざわめく音。僕の呼吸。それだけが聞こえる。聞こえている。

僕と少し距離を開けた右隣に彼女は立っている。月に照らされる彼女はまるで1つの彫刻のようだ。

目を閉じ少しうつむいているその横顔に当たる月光が、彼女の透き通るように白い肌を照らす。背中の中ほどまで伸びる金の長い髪は、ゆっくりと風で揺れ、少し緩んだ口元は限りなく優しい。周りの音を、風を、匂いを楽しむように、味わうようにして静かに佇むその姿は、まるで永遠に続くかと思われる。

「la——」

その永遠を破ったのは彼女自身だった。少し開けた口から、囁くように、静かに、細く流れ出るソプラノボイス。その声を聞いた瞬間、周りに時が止まってしまったかのような静寂が訪れる。

「la——lalalaaa——」

始めは細かった声が徐々に大きく、強くなり、そしてまた小さく、

弱くなり、それを寄せては返す波のように繰り返しながら、音を奏でる。森が、風が、草が、まるでその声を表現するようにざわめき鳴る。

その声に思わず聴き入っていると、彼女が歌いながらこちらを見て手を差し伸べてきた。それを見て僕はゆっくり頷き、音を奏ではじめる。

「a——」

僕のテノールボイスが響き始める。彼女のソプラノと混ざり合いながら、自然が奏でる音と混ざり合う。

どこまでも、どこまでも響く。
遠く、遙か遠くへと。

ゆつくりと、余韻を残しながら歌が鳴り止む。彼女と僕、そしてここにある全てが息を潜める。

静寂。

「この空に輝く月よ」

唐突に彼女が歌い始める。讃えるように、優しく、力強く。

「空を穿つ君よ」

後を追う様に僕も歌う。この光景を目に焼き付けながら、その思
いを歌に込めながら。

「私の心を癒やし給え」

「心を穿つ君よ」

「渡りゆく風よ」

「私を包む君よ」

「支える地よ」

「私を支える君よ」

『共に奏でよう』

「癒しの歌を」

「讃えの歌を」

「護りの歌を」

「調和の歌を」

「悠久の歌を」

「未来の歌を」

「命の歌を」

「古の歌を」

『全ての旋律を』

『全ての思いを』

『等しく』

歌の余韻に浸っている。生き物も、自然も、何もかもが思いを等しくし、心地よい一体感を得る。

「今日もありがとう」

そう言う彼女の声でみんな我に返る。そうして生まれる賞賛の声。みんな楽しそうにしている。

嬉しい。ただ、僕は嬉しかった。みんなが笑顔なことも、歌うことで一体感を得られたことも、今僕がこうしてここにいることも。たくさんさんの幸福が積み重なって、僕の心はいっぱいになる。この気持ちを表すのに、1番適切な言葉、きっとそれは、

「今日もありがとう」

日の出を見よう その1

ドンッ……ドンッ……という音がする。何か重いものがぶつかるような音だ。ドンッ……ドンッ……。一体何の音だ……うるさくて布団を頭まで被った。ドンッ……バキッ！

え、バキッ？　なんか妙な音だなあはは、とか思っていると、自分に何かが近づく気配がある。

「起きてくださいねえ」

「え……まだ外は暗いよ……明るくなってからよろしく……」

「冬の森にいくんですよねえ？」

「……すーっ……すーっ」

この直後、僕は布団を引き剥がされた。布団にしがみついていたせいで、自分まで一緒にベッドから床に落ちた。

「ぐあ……」

天井を見上げる形になった僕の顔を覗き込むのは、ゴウだった。痛さで目の覚めた僕はようやく思い出す。

「あ……そうだった。冬の森で朝日を見るんだったね」

「そうですねえ。歌姫を起こしてきてもらっていいですかねえ？」

「わかった。ちょっと待ってて」

そう言っただけで彼女の部屋に行こうとすると、外の景色が見えた。玄関から。

「なに、この大きい穴？」

「開けようと思って玄関にぶつかっていたら、なかなか開かなくて

つい力が入ってしましましてねえ……」
「……引くんだよ、こ」

玄関の跡形すら無いその大穴を見て、これは悪い夢だと現実逃避をしながら彼女の部屋の前に行き、扉をノックしようとする、扉が急に開いて僕に直撃した。

「ぶっ……」
「どうしたの……こんな時間に騒いで……」

扉の影で僕が悶絶していることには気づかず、彼女は玄関の大穴を見た後、ゴウを見てこう言った。

「扉は外からは引いて、内からは押すのよ。こんな風に」

え？ こんな風に？ 悪い予感しかわかない言葉を聞いた。遠ざかるドア、離れようとする僕。近づくドア、脚がもつれて離れられなかった僕。

「むあーっ！」

僕が痛みに悶絶の声を上げると、彼女は扉の影にいる僕を見て、

「いるならいるって言って。危ないから」

「なにを言えればいいのかな……？」

「んー……おはよう、ちなみに僕はここにいます、とか」「朝から居場所を言わないといけないなんて、恐ろしく寝相が悪いんだろうね、僕」

「そっじゃないの？ だってそんな所で寝ているし」

妙な勘違いをされてしまった。次からこんなことにならないように叫んでみようと、そんなことを思いながら僕たちは出発の準備を始めた。

道中。

「冬の森のどこで朝日を見るの？」

「ええと、山に登るんですね」

「山を！？」

「そんなに驚くことでもない。日の出が森の中から見えないのは当たり前」

「確かにそうだけど……大分時間かかるんじゃない？」

「んー、今から休まず歩き続ければ、丁度良い時間につきますねえ。心配しないでいいですねえ」「わかった。ところで、モケットは？」

「私の背の上でずっと寝ていますねえ」

「……ま、寒くなってきたら起きるだろ。それまでは寝せといてやるう」

「ん、わかった」

もうすぐ森に入る。冬の山に登るのは初めてで、僕は緊張半分、期待半分だった。

日の出を見よう その2

以前、冬の森で僕が心奪われた銀世界。それが、今違う美しさを持って目の前に広がっている。

地面を覆う雪は淡い月の光を受けて青白く輝いている。夜の真つ暗な闇の中、僕達の足元だけが輝く。森は寝ているかのように静かで、僕達の雪を踏みしめるサクサクという音が心地いい。空気はどこまでも冷たく澄んでいて、呼吸の度に胸が一杯になる。

ここの景色は日中しか見たことがなかったので、もの凄く新鮮に感じた。

「あとどれくらいで山に登り始めるの？」

「んー、あと五分後くらいでしょうねえ」

思っていたより森から山までは近いようだ。既に周りは雪が積もっているが、服を着込んできているので、山でもとりあえず寒くはないだろう。

「寒くない？ 大丈夫？」

「大丈夫。いっぱい着てるから」

彼女に聞くと、こう答えた。寒さに関しては心配しなくてよさそうだ。

「ここからが山ですねえ。寒くなりますが大丈夫ですかねえ？」

「大丈夫」

2人で声を揃えて言うと、ゴウは頷き、山の斜面を登っていく。その後に続いて僕たちも登っていった。初の雪山登山、その事実に期待と不安を抱きながら。

「はっ……はっ……」

山の斜面は登れば登るほど急になった。体力の消耗もどんどん激しくなり、僕は荒い息を吐く。それに比べて彼女とゴウはまるで疲れなんて知りませんとも言つようにすすいと進んでいく。……一体どんな体力作りをしているんだ？特に彼女。家に帰ったら教えてもらおうと思った。

またしばらく登って、もうそろそろ体力の限界がやってきそうだと思っていると、唐突に彼女が口を開いた。

「ゴウ、少し休憩しよう」

「わかりましたねえ。予想より速いペースで来れたので、少しは休憩できますねえ」

多分、僕が疲れているのに2人とも気を遣ってくれたのだろう。その好意に甘えさせてもらって、俺はその場にへたり込んだ。

「あなたは体力が無さすぎる」

「しかたつ、はあ、ないだ、ろ」

息も絶え絶えな俺の目の前に立っている彼女は、容赦なく鞭打つ言葉を投げかけてきた。が、次にこう言った。

「だから、帰ったら一緒に走って体力つけよう？」

「え？ ほん、と？」

「うん。色んなところに行こう？」

……彼女がいつのまにか飴と鞭を使い分けていた。そんな笑顔で提案されたら、いくら僕が走るの苦手でも頷かざるをえないじゃないか。

「ありがとう。……ふー」

「落ち着いた？」

「うん、大分。ゴウ、もう大丈夫だよ」
「それでは、出発進行ですねぇ」

大分高くまできたのだろうか。山に入る前よりかなり寒い。風が吹いてないのが唯一の救いだが、それでも顔が冷たい。

彼女を見ると、中の白いセーターの襟を鼻まで上げて寒さを防いでいた。被っているニット帽とあいまって、目しか見えない。僕もそれにならって黒いセーターを上げた。

「ここが頂上ですねぇ」

そう言ってゴウは止まった。そこは斜面ではなく、平らな場所だった。だいたい10m四方の平坦な地形が広がっている。周りを見渡すと、春夏秋の山がそれぞれ見える。そして、山の向こう側、朝日が上る側はまだ何も見えない。

僕は何も言わず、彼女と手を繋いだ。心配そうに彼女は僕を見ってくる。彼女に大丈夫という視線を送り、僕は朝日の上る方向へ顔を向ける。そして、2人で一步一步前へ進み、平坦な頂上ギリギリに立った。

ゴウは後ろの方で朝日の方向を見ている。

地平線が赤く光った。朝日がゆっくりと現れ始める。そして、風景が照らされていく。赤く、赤く、染め上げられていく。雪が日光を反射して眩しく光る。そして、僕は見る。ここの周りを囲む景色を。

「海……」

ここは、この小さな島は周りを海に囲まれていた。地平線には何も見えない。どこまでも続く、澄んだ海。

太陽に照らされてキラキラと赤く光っている。

僕は……この風景を知っている。昔、遠い昔、僕が見た風景と寸分変わらず同じだ。

彼女が少し強く僕の手を握ってきた。それに勇気づけられるように、僕はこの光景を目に焼き付ける。忘れないように。決して、忘れないように。無くしてしまった、たくさんのものを。

日の出を見よう その2（後書き）

やっと物語が進んできました。

最後の意味がわからないだろうとは思いますが、意味がわかるように展開する予定ですので、付き合っていていただけると嬉しいです。

ちなみにモケットが目覚めたのは、家に帰り着いてからでした。実につかえないのですw

昔々のお話 その1

「今日も人間が家を潰していった」

「今日も人間に家族を殺された」

「今日も人間に縄をつけて引きずられる」

どこからともなく声が聞こえる。右の雑草から。左の木の上から。足元のアスファルトから。空から。どこまでも深い悲しみと憎しみが混ざった声。僕がただ街を歩いているだけで聞こえる声。

「今日は仕返ししてやろう」

「今日は復讐してやろう」

「今日も、明日も、明後日も。どれだけたつても許さない」

「許さない」

「許さない」

「許さない」

常人ならば発狂してしまうであろう、そんな声達。僕はそんな中を眉一つ動かさず歩いていく。

……僕はもういい加減慣れてしまっているのだ。何故なら僕は生まれた頃からずっとこの声を聞いているのだから。

何かあるようで何もない時間。そんな無意味なものを積み重ねただけの人生を、乾いた心を仮面で覆い隠して過ごしていく。僕はそうやって死ぬまで生きていくのだろう。

人が他人を恨み、妬み、傷つける。それらを人だけでなく他の種にも広げながら、なにかもを壊す。そして生まれる復讐。増大する悲しみ。永遠と続く負の連鎖。

それをずっと感じてきた僕の感情は死んでしまっていた。なのに

僕はさも感情があるかのように振る舞い続ける。家族を騙し、友達を騙し、何もかも騙して。

もう嫌だっと思ってているのに仮面を被ることをやめられない。何故だろう。僕が臆病だからだろうな、きっと。

この世界は汚い物ばかりしかないと、僕はそう思っていた。彼女が現れるその時まで。

これは、この世に全く染まっていない、純真無垢な空っぽの天使^{かな}奏と“綺麗”を探す話。遠い遠い昔からこの瞬間の今まで、そしてこれからもずっと続いていく、悠久の物語。

昔々のお話 その1（後書き）

何故、同時に四季がある島なんてあるのか。

何故、“綺麗”を探すのか。

何故、主人公達と動物達は言葉をかわせるのか。

何故、主人公達の名前が出ないのか。

そういう疑問を解消してくれるだろう章。

“綺麗”を探す旅の合間に挟まるシリアス。

そういう位置付けの話となっております。

走りに行こう

「それで？ どこを走るかは決めた？」

「うん。夏の森を走ろうかなって思ってる」

「わかった。じゃあ、着替えてくる」

「そうだね、走るんだからそれなりの格好をしないと。僕も着替えて外で待ってるよ。」

先日冬の山登りで、体力の無さを露呈してしまった僕は、彼女の提案により走り込みをすることにした。

運動が苦手な僕にとってこれはなかなかの苦行ではあるが、また山登りをするとなった時に醜態を晒すのはまっぴらごめんだからね。

そんなわけで。運動着に着替え、外に座ってぼーとしながら彼女を待っていると、

「それじゃあ、行きましよう」

という声と共に現れた。現れたのだが……

「……ねえ」

「どうしたの？」

「その服は？」

？ という表情で、彼女は自分の体を見た。

「どこがおかしい？」

「いや、おかしいっていうか……」

僕は苦笑しながら彼女を見る。苦笑の理由、それは彼女の服装が僕の通っていた高校の体操服だったからだ。

左胸のあたりに「奏」と書いてある白い半袖のシャツに、膝が見える黒いハーフパンツ。白い靴下に運動靴。覗く肌が透き通るように白く美しい。金の髪はポニーテールに結い上げられ、いつもの髪を下ろしている時とは全く違う印象を与える。青の大きな目にすつと通った鼻筋、かわいらしい桜色の唇。体操服を着た、何もかもが完璧な絶世の美少女である。

「この服は、クローゼットの中に入ってたの」

「……まあ、僕も学校の体操服だしね。気にせず行こうか」

自然の中を体操服姿の2人が歩く光景は、なかなかシユールなものだったに違いない。生き物達が不思議そうにこちらを見ていたし。

夏の森に到着した。ここは常夏の森。木は青々と茂り、溢れんばかりの生命を感じる。確かに暑いが、心地よい風が吹いているので、とても清々しい。

「到着。もう走る？」

「……よし、走ろう」

彼女にすぐに走ろうと言われ、僕は決意が鈍る前にそうすることにした。

まだ入り口のほうなので、木はそこまで密集していない。奥に行くともっと困難だろうが、今のうちはまっすぐ走れそうだ。

「いくよ。……よいどん」

よいどん、なんてどこで覚えたのと言いたかったが、彼女がすいすい進んでいくため、何も言えなかった。それにしても速い。かなり一生懸命走っているのに、平気な顔で走っていく。徐々に彼女の背中が遠ざかっていく。

「は、速すぎっ」

たまらずそう叫んだ僕に、彼女は顔だけ振り返って怪訝そうな顔をした。

「遅すぎっ」

グサツときた。そ、そんなストレートに言わなくてもいいじゃないか…… そう思ってたしよんぼりしながら少しペースを落として走っていると、彼女は僕の隣に並んで、同じ速度で走り出した。

「ごめんなさい。言いすぎた」 彼女は前を向いたままそう言ってくれた。前を向いたままなのは照れ隠しなのだろうか。

「大丈夫、気にしないでっ。それより、頑張っつ走ろっ」

息を切らしながら言ったせいで、変な喋り方になってしまった。それを聞いてクスクス笑う彼女。僕も自分で吹き出しそうになるが、とにかく走ることに集中した。

「お疲れ様」

「……ふう」

大分走ったのだろうか。彼女にそう言われて止まったのは森の奥だった。木が大分茂っているの、木陰ばかりになっている。ここにも気持ちよく風が吹いていて、汗をかいた身には心地よい。木から少しだけ漏れ出した太陽が、まるで宝石を散りばめたように地面を照らす。

二人並んで木に背中を預けて座った。

「森林浴なんてどう？」

「ん、いいと思う」

彼女は頭上高くにある枝を、顔を上げて眺めている。僕が前にある木を眺めてぼんやりしていると、彼女は頭を僕の肩に預けてきた。目を閉じているところを見ると、眠いようだ。

「気持ちいいねえー……」

「うん……」

お互いそれだけ言って手をつなぎ、心地よさに任せて目を閉じる。手から彼女の温もりを感じる。生きている。僕らも、森も、何もかもが生きているんだ。幸せなこの今に感謝しながら、僕らはゆっくりと眠りへと落ちていく。

ずっと、ずっと。こんな優しい世界が続きますように。そんな願いを抱きながら。

自転車で行こう

先日、僕たちは夏の森を走った。それというのも、僕の体力作りのためだ。はずなのだが、しばらく走って着いた森の奥で、ぐっすりと寝てしまったのだ。その原因というのは、僕の場合は疲れのため、彼女の場合は眠るのが好きなためだ。抗えない何かが、そこにはあったのだ……多分。

起きたときには既に日が暮れていて、そして僕は筋肉痛で立ち上がれなかった。

「……ここまでとは思っていなかった」

彼女が失望の目で、立ち上がれずに地面に這いつくばる僕を見ていた。何も言い返せない自分が悲しかった。

その後、森の半ばまで彼女におぶってもらい、次にそこで出会ったライオンのキラにおぶって家まで運んでもらった。

家に帰って更に落ち込んだのは、言うまでもない。

そして今日の朝。

「わかった！ やり方が悪かったんだ！」

家の前の草原で二人並んで寝そべって、日向ぼっこをしているときに、僕は跳ね起きてそう言った。

「なんの話？」

彼女は寝そべって目を閉じたまま、こう尋ねてきた。

「昨日のこと。いきなり走ったのが間違いだっただよ」

「というと？」

「自転車でサイクリングをしよう！」

「自転車って、あった？」

「……体操服があったんだから、多分探せばあると思うんだ」

「体操服があるのって、そんなに变なの？」

僕は苦笑しながら、首を横に振った。だって、ここで首を縦に降ったら、きっと彼女は体操服を着なくなるだろう。普通の格好で運動して、怪我でもしたら大変だからね。まあ、あの格好が新鮮味に溢れているから、っていうのもあるのだけど。……つまり、僕は彼女の体操服姿をまた見たいと思っているようだった。

「あったー！」

家の物置を漁ること十分。新品同然の二台の自転車が見つかった。ちなみに、二台ともママチャリで、一方は黒、もう一方は金である。僕が黒を、彼女が金の自転車をおして外に出た。

「さ、行こうか」

僕が笑いながら彼女にそう言うと、彼女はキョトンとした顔をしてくっ言った。

「これ、どうやって使うの？」

……僕の体力増強計画は、既に頓挫しそうだった。

「まずは、バランスをとるところから始めようか」
「ん」

彼女に自転車にまたがってハンドルを握ってもらう。今日もボニーで体操服だ。それにしても、金髪碧眼の美少女が金のママチャリと合わさると、もうなにか神々しい。というか、まず金のママチャリが似合う時点でびっくりなのだが。

彼女は両足を曲げて少し地面から浮かし、バランスを取り始めた。右に左にふらふらしながら、それに合わせて頭もゆらゆらしている。

「危なくなったら、すぐに足を地面についてね」
「ん」

僕はそうアドバイスした。

が、杞憂になりそうである。何故なら彼女は、ふらふらはするものの、一回もまだ足についていない。驚異的なバランス感覚だ。

「よし、そんなもんでいいよ」
「これでもう一緒に走れる？」

彼女は目を期待で輝かせながらそう聞いてきた。

「まだだよ。でも、ここが一番難しいから、もう終わったようなものだよ」

「わかった……頑張る」

少しだけしょんぼりした後、彼女はガッツポーズをした。

「危ないっ！」

瞬間、彼女が僕の方に倒れてきた。咄嗟の判断で彼女を抱き止めるが、昨日の筋肉痛がまだ残っているようで、そのまま後ろに倒れてしまう。このままでは彼女の左足が下敷きになってしまう！だが、見ていることしか出来ない。あと少しで地面と当たる！

その時、彼女が動いた。右足で自転車のフレームを蹴ると、僕を押しながら飛んだ。とつさに空中で彼女を抱きしめ、背中から地面に着地する。

がしゃんと自転車の倒れる音がした。

彼女の匂いがする。僕を包み込むような、そんな優しい匂いだ。

「……大丈夫？」

「私は大丈夫。あなたは？」

無言で抱きしめる。互いを安心させあうように、僕は抱きしめ合った。

その後、僕は練習を再開した。

「それにしても、まさかまだ足を地面についてなかったなんてなあ……」

「不注意だった。ごめんなさい」

少し落ち込んだ様子で彼女は言う。

「大丈夫、次から気をつければいいからさ」
「……わかった」

二人の楽しそうな笑い声と、自転車の車輪が回る音が響いていた。

一時間後、彼女に追いつけずに、どんどん引き離されていく僕の姿があっただのは、秘密にしたいなあ……

森で歌おう 夏編

サイクリングが日課となった近頃。僕達は自転車で競争を始めた。夏の森の周りをグルッと一回りするコースで、どっちが速いか競争するのだ。

最初は彼女の圧勝だったのだが、僕も体力がついてきて、そこそこの勝負が出来るようになったと思う。ただ、ゴールしてもほとんど汗をかいていない彼女を見る限り、それは思い込みなのかもしれない……

日中僕達はそれをしながら、他の誰かがいたら競争をやめて、いっそこで歌を歌いますよ、というお知らせをしていた。わざわざみんなのところに言っただけで伝えていたら、この前のように何時間あっても足りない可能性があるからだ。

僕の体力増強にもなるし、お知らせもできる。まさに一石二鳥のサイクリングなのだ。

そして今日がその日、歌を歌う日だ。夏の森の名所は真ん中を通る川だ。暑い中冷たい水を浴びるといのは実に良いものだし、太陽のもとで煌めく水飛沫は美しい。

そして夜。水の流れる音が心を癒やす。静かな水面に映る金の月は、荘厳な雰囲気を持っている。

僕らは座ってそのゆらゆらと揺れる月を見ている。

「今見ている月は、嘘の月」

僕は言う。

「もし、僕達が本当だと信じている物が、こんな風に嘘の物だしたら」

心の泥を吐き出すように、僕は言う。

「みんなはどう思うのかな」
「でも」

僕の言葉を打ち消すように、彼女は強く言葉を紡ぐ。

「綺麗だよ。本物とは違って、その月は綺麗だよ。だからみんなここが、この景色が好き。」

彼女は僕の手を握る。

「あなたが選んで私が作ったこの世界も、綺麗だよ。だから、みんなここが好き。だから自分だけを責めないで」

俯く僕を彼女は抱きしめる。

「罪は、一緒に背負っていこう。」
「うん……ありがとう」

知らず涙が零れて、彼女の肩を濡らす。僕は独りじゃないという安堵が、どこまでも優しく僕を包んだ。

僕と彼女は片手を繋いで向き合ったまま立ち上がる。

「川面の月が綺麗」

彼女の独唱を、僕は聞く。

「ゆらゆら、ゆらゆら揺れる」

「そんな儚い月」

「ならば私は川となろう」

「月を映し続ける静かな水面になろう」

「その月が消えないように」

「私が護ろう」

僕は答えるように、僕の独唱を紡ぐ。

「僕は月」

「消えない、儚い月」

「嘘のない、嘘の月」

「何が正しいのだろう」

「何が誤りなのだろう」

「わからず悩み、でも登る僕」

「そんな時、静かな川を見つけた」

「その川面に映る僕を見た」

「それは綺麗な月だった」

「それがわかって悩みは綺麗に無くなった」

「ありがとう」

「川にそう言って、僕はずっと在り続けた」

「その川とずっと一緒に」

この二つは、僕らを表す歌。そしてお互いの思いを相手に伝える、
そんな歌。二つの独唱は一对の歌。彼女と僕は、二つで一つ。
そんな思いを抱きながら、僕は微笑みあった。

ふらつと歩いてみよう

「それじゃあ、今日は別行動の日ってことで」

「わかった。いつてきます」

「うん、いつてらっしゃーい」

私は時々、一人でふらつと出歩きたくなる日がある。そんな時、私は彼にその旨を伝えて出かけるのだ。

「今日は私はどこへ行く？」

心赴くままに歩いてみよう。何も考えず、頭を空っぽにして。この綺麗な青空の下を。

しばらく歩いてたどり着いたのは、春の森だった。特徴として、ここには鳥が多くいる。また、木々の生える場所が偏っているため、草原と深い森が隣り合っている。

私が今いるのは森の入り口。草原が続いている。

私はそこに仰向けに倒れて空を見る。すると、空から降りてくる小さな影が一つ見えた。

私が手を伸ばすと、その影は手の平に止まった。

「今日は一人でお出かけかい？」

と、しゃべりかけてきた。

「そう」

しゃべりかけて来たのは、雀のチヨだ。

「何か悩みでもあるのかな？」

「はつきりとはわからない。でも、多分そう」

「そうか……」

彼女はそう相槌を打つと、ちょこんと飛んで、私のお腹に乗った。

「まあ、私に話してごらんよ。とりあえず、聞くだけなら聞くよ」
「ありがとう」

私はこうやって、彼女に悩みを相談する。

「私は、あの人の支えになれているの？」

「そりゃ、もちろん」

「あの人は、今幸せ？」

「そうじゃないと、あんな顔は出来ないだろうさ」

「あの人は、変わった？」

「最初と比べたら、そりゃ見違えるように、ね。それも良い方向に」

打てば響くようにに答えてくれる。だから、私は安心して相談できる。

「何が変わったの？」

「それはわからないよ。何か悩みが解消したんだろうけど、その悩みが何かは私は知らない。気付いたら、私がいて、みんながいて、あんた達がいたから」

あの人が具体的に変わったことと言えば……

「笑顔が増えた」

「確かに、あいつは最初あまり笑わなかったからね」

「……これしかわからない」

「気付いてないだけさ。いつも一緒にいると、徐々に変化する物には気付けないものさ」「そういうものなの?」

「そ。そういうもの」

多分、私はあの人の何が変化したのか具体的にわからないことで悩んでいたのだ。

「ありがとう。気付けるように頑張る」

「頑張る必要は無いよ。それはある時ふっと気づくものだからね」

「そういうもの?」

「そういうもの」

それじゃ、というとチヨは飛び立っていった。私も別の所に行ってみよう。

ここは冬の森。

ここには、小さな湖がある。凍った、静かな湖だ。私はその前に座って、目を閉じた。歌を口ずさむ。

「君に見せたい景色があるんだ」

「それは僕の中にある」

「だから僕は君に伝えよう」

「この歌に思いをのせて」

「君と共に歌える日がきたら」

「次は君の歌を聞かせて」

「そして僕も共に歌える日がきたら」

「次は2人の歌を作ろう」

「そしてみんなに伝えよう」

「僕と君の思いをその歌にのせて」

この歌は、彼が最初に歌った歌だった。昔、あの悪意に満ちた世界が嫌で、苦しんでいた彼。

彼は、私と出逢い、私が空っぽだと知ると、歌という物を教えてくれた。

「この世界の中で、君みたいに純粹で、綺麗な物。それが歌なんだ」

そんな事を言った後、彼はこの歌を歌った。そして、こうも言った。

「歌には思いがこもっているんだ。君は歌みたいに綺麗だけど、思いが空っぽだ。だから、思いを紡ぐんだ。そして、君が歌になれたら、その時はこの嫌な世界を変えよう。僕と君で、この世界を“綺麗”で埋め尽くそう」

この歌は始まりの歌だ。彼との出逢いの始まり。私の始まり。
“綺麗” 探しの始まり。

私は昔を思い出しながら、いつまでも歌を歌い続けた。

「ただいま」

「おかえり。良い笑顔だね。何か良いこともあった？」

「気付いたの」

「？」

「あなたは、変わっていないんだって」

ふらっと歩いてみよう（後書き）

何もかもを失っても、それでも変わらない心、意志。

それがあれば、きっとその人は何にも負けないでしょう。

昔々のお話 その2

「純、朝よー。起きなさい」

母の声が聞こえる。目を開ける。ベッドから出て、高校の制服に着替える。部屋を出て、階段を降りてリビングへ。

「おはよう、純」

「おはよう、父さん、母さん」

呼んでいた新聞から顔を上げ、微笑みながら父は挨拶する。それに応えて、僕は食卓の席に着いた。

和やかな、円満な家庭の朝の光景。良くありそうでなかなか無い、そんな幸せな光景。

僕の名前は、空見^{そらみ} 純^{じゅん}。高校二年生の男子だ。今日もいつものように朝食を食べ、身支度をし、行ってきますの声と共に玄関を出る。

途端に溢れ出る、狂気の声。今日も人々と動物達は、変わらず叫んでいる。その中を平然と歩いて学校へ行く。人々の声の中、友達とたわいない話をして、授業を受け、家に帰って、晩ご飯を食べて寝る。

今日も変わらずこの世界は歪んでいた。そんな思いと共に、僕はいつも通り眠りに落ちた。

「……きて」

声が聞こえる。

「起きて」

女の声。僕の知らない声だ。誰？

目を開けると、そこには月の光を浴びて立っている、金の髪と青の目を持った、美しい人ではない何かが立っていた。
何故僕がそれ（・・・）は人ではないと分かったのか。

「お前、なんで心の声が聞こえないんだ？」

そう。何も聞こえないのだ。母も、父も、鳥も、友達も、先生も、何もかもから雑音のように聞こえていた声が、聞こえないのだ。

「私には心がないから」

そんなわけがない。いくら傷ついても、心を完全に捨てることは出来ない、この能力が実際に証明してくれるのだから。

「お前は何だ？」

だから僕は問う。もし僕の命を取りに来た悪魔だというのならそれでもいい。死に踏み出せない僕を連れて行ってくれ。そんな自棄な考えを抱きながら、僕は問う。

だが。次に彼女が放った言葉は、僕の予想を、常識や知識を、遙かに超えていた。

「私は、あなたの作り出した天使」

僕が作った？意味がわからない。天使というならまだわかる。悪魔をありうると思ったのだ。その逆もありうるだろう。

「僕が作った？意味が分からない」

「あなたは、自分の能力に疑問を持ったことはありませんか」

唐突な質問。

「あるさ。当然」

「あなたは、自分に疑問を持ったことは？」

「さっきもいった通り、あると」

「あなたは、」

突然質問責めにしてきたそれ（・・・）は、次に酷い、酷い質問をした。

「あなたのような、普通の人間ではない存在が普通の生活を送れていることに、疑問を持ったことはありますか？」

「そんな疑問は」

「いつからあったのですか、その能力」

それ（・・・）は僕の言葉を切って、僕の心を切って、僕を傷つける。

「生まれた時からだ」

「では、いつ気付いたのですか？それが異常と」

……わからない。記憶に無い。気付いたら僕はこれを異常だと知っていた。

「あなたの家族は何故それを知らないのですか？」

「あなたは誰かにそれが異常か聞きましたか」

「何故その異常を、自分が異常なことをさも当然のように受け入れて生きているのですか？」

何故僕はそんな単純なことに気づかなかった？何故？なぜ？なぜ？僕の頭をなぜが支配する。

次に、それ（・・・）はこう言った。

「その質問に、答えを与えます」

昔々のおはなし3

目の前に立つそのナニカは、僕をまっすぐに見つめながら、こう切り出した。

「あなたは、神だった」

「神……？」

存在など信じられない物を出され、僕は困惑し、思わず尋ね返した。

「全てを創造した存在。私達の始まりです」

「それがなんで僕なんだ？」

「神は、全ての生物を作り、その進化・成長を見ていました」

「何のために？」

僕は混乱と動揺を必死に押さえ込み、そう質問した。

「自身という存在の意味を見つけるためです。神は気付いたら存在していた。なのに、今の私達の持っている道徳観を備えていた。そして何故そうなのかを考え、ある結論に達しました」

ナニカは少し黙った後、僕の問いへの答えを言った。

「自分は、今の自分にある記憶のみを残して、ナニカに創られたの

だど。しかし、ここでまた疑問が出てきます。自分はなぜナニカによって作られたのか、という疑問です」

口が異常に乾く。言葉を発そうとしても、金魚のように口を開け閉めするだけになってしまふ。

「そして、神は自分のコピー、つまり人々を創りました。しかし、どう頑張っても人は自分と比べても恐ろしく未完成にしか創れませんでした。そこで、人が幾世代も繁栄できるシステムを創りました。文化を継承させることによる進化の果て、自分と同等の存在が出来ることを願って」

ナニカの青い瞳は僕を射抜いたままだ。

「しかし、進化していく人々は、自分には無い衝動も見せ始めました。つまり、憎悪や欲望です。何故か。神はこう結論付けました。『自分を作ったナニカがそれらを持っていた。しかし、自分には不要のためその記憶を消した。しかし、自分が思い出せないだけで、自分の中にはその衝動が眠っていて、不完全なコピーである人々に発現してしまった』と」

嫌な汗が出てくる。

「ナニカが存在を知るために、その衝動を深く知らなければならぬ。そう思った神は、人に擬態し、人々の世界に紛れ込みました。完璧に人をシミュレートするために、自分の記憶を消して」

頭で鐘が打ち鳴らされている。頭が割れそうに痛い。しかし、ナニカの目から逃れられない。

「そして、神の擬態した人が死んだら、神としての記憶が戻る仕組みでした。それを何千回と繰り返しました。繰り返す度、神のはその衝動を理解していきました。しかし、同時にその衝動は神自身を蝕んでいました。何故なら、神にはその衝動を汚いと思う道徳観が初めからあったからです。」

ナニカの声が耳に強制的に入ってくる。聞きたくない。

「そして、ついに耐えきれなくなった神は、そんな恐ろしい、汚い衝動を抱える人々を消してしまおうとしました。しかし、神の人として過ごした数千年の記憶が、その行動を引き止めました」

何も考えられそうも無い程、頭は白熱しているのに、芯だけは冷えている。

「神は人々を消していいのか悩みました。しかし、その結論を出すには、神は多くを知りすぎました。そこで、神は決めたのです。次に人となった自分が出した結論にしよう、と」

「そ……それが」

僕のやっとの思いでひねり出した言葉に、ナニカは頷いた。

「あなたこそ、その神の最後の人。わかりやすく言うなら、神の生まれ変わりで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9978x/>

空の君と

2011年12月20日20時49分発行